

---



---

## 学内活動報告

---



---

順天堂大学医療看護学部 医療看護研究22  
P.40-47(2018)

### 第2回臨地実習指導者研修会報告

## The Second Clinical Instructor Training Program 2017

原田 静香<sup>1)</sup>  
HARADA Shizuka

伊藤 龍子<sup>1)</sup>  
ITO Ryuko

湯浅 美千代<sup>1)</sup>  
YUASA Michiyo

村岡 宏子<sup>1)</sup>  
MURAOKA Kouko

高島 えり子<sup>1)</sup>  
TAKASHIMA Eriko

幅下 貞美<sup>2)</sup>  
HABASHITA Sadami

### 要 旨

昨年度に引き続き、本年度も臨地実習指導者研修会が年間計3日間にわたるプログラムとして実施された。よって本活動報告においては研修会の概要と成果を報告する。本年度は47名の受講生を対象に、3日間の研修において4つの講義と3つのグループワークによる演習が実施された。研修後の評価アンケートでは、講義の理解度、知識の習得度、グループワークの満足度において3日間とも概ね良好な結果が得られた。「指導者の教育的役割」については12の項目が抽出され、グループワークにてさらに指導者の役割について討論し、教育的役割と考える概念についての関連図が作成された。最終レポートとして課された「臨地実習指導における自己の課題と指導者像」に関して、受講者が述べていた内容を抽出したところ、10カテゴリが見出された。臨地実習指導者が学生を理解して深い学びにつなげたいと考えている思いや、実習環境を整えるために病棟スタッフとの調整の実施、自分自身の研鑽活動への継続の必要性について述べられていた。3日間にわたる研修会の意義と成果が示唆されていると考える。

キーワード：臨地実習指導者研修会、教育的役割、臨地実習指導者像、実習記録指導、自己の課題  
Key words：clinical instructor training program, educational role, clinical instructor image, training records instruction, self-task

### I. はじめに

順天堂大学医療看護学部（以下、本学部）の臨地実習では、病院で行われる実習においては主に附属6病院内で実施している。そのため、同じ学校法人内の看護職と大学教員が連携・協働し、実習指導に取り組むことが特徴である。その連携・協働の機会の一部となり、共に実習指導の質の向上を目指す活動として、平成28年度より臨地実習指導者研修会が年間計3日間のプログラムにて開始された。

第2回目となる平成29年度臨地実習指導者研修会（以下、本研修会）では、昨年度の実績を基にさらなる充実した研修成果を得ることが目指された。本報告においては、本研修会の概要と成果、今後の課題について報告する。

### II. 本研修会の概要

#### 1. 運営委員会の組織

本研修会は医療看護学部及び順天堂大学附属6病院看護部の共同開催である。本学部および附属病院からメンバーを選出し、本学部FD委員会の下部組織である臨地実習指導者研修部会を設置して実施している。

---

1) 順天堂大学医療看護学部  
Faculty of Health Care and Nursing, Juntendo University

2) 順天堂大学医学部附属順天堂医院  
Juntendo University Hospital

2. 目的・目標

本研修会の目的・目標は、表1のとおり定めている。

3. 受講対象者

本研修会を受講する対象者は、順天堂大学附属6病院および本学部が実習している各施設において、本研修会の受講を希望する看護職とした。主な条件としては、看護職としての実務経験を3年以上有し、臨地実習指導能力を高めることに自ら興味と関心を抱いており、各施設の看護管理者が必要と認めた者とした。

本年度は6か所の附属病院から46名が受講することとなった。

Ⅲ. 実施内容と研修成果

1. 第1日目：平成29年8月24日(休)

(1) テーマ：看護学教育と臨地実習指導の基礎と困難事例のリフレクション

(2) 当日の内容：第1日目の研修概要は表2の通りである。

(3) 講義Iの講義概要

まず、看護学教育の基礎となる大学教育の概要についての講義があった。大学教育の目的や理念、大学における看護系人材養成のあり方、看護教育の質保証へ

の取り組みについて、看護基礎教育課程の変遷と関連付けながらの解説であった。次に、看護教育における臨地実習の位置づけや意義について学び、臨地実習を実施する上で、学生の指導にあたる臨地実習指導者に期待されている役割についての解説があった。

(4) 演習Iグループワークによる学び

学生指導で困難と感じた場面について、各グループで自身の経験をもとに過去の事例を共有した。多種多様な事例が集められたが、指導が困難と感じた要因として「実習目標が病棟スタッフ間で認識されていない」「臨地実習指導者や病棟スタッフが、学生の実習前までのレディネスを十分に理解していない」「学生の知識不足、看護のアセスメント力不足」「指導後に学生がどのように反応するか予測できない」等が抽出され、それぞれの課題を明確にしていた。

さらにそれぞれの課題に関しどのように学生へ対応すべきか、実習指導を円滑にするための方法等が各グループで討論された。「大学の担当教員と臨地実習指導者との情報交換の方法の見直しと強化」や「各学生の良い面を引き出し、肯定的に接する」等、実習運営から個別対応に渡る方策が各グループで検討された。それぞれの方策について、各自が病棟へ持ち帰り、病棟全体の問題として共有していきたいとの意見も聞

表1 臨地実習指導者研修会の目的・目標

【目的】	臨地実習施設等において、学生の学習指導に関わる看護職者に必要な能力を高め、臨地実習施設と医療看護学部の連携及び協働に資することを目的としている。
【目標】	<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 臨地実習指導の基礎となる教育的役割について理解する。</li> <li>2) 看護基礎教育における臨地実習の位置づけと目的を理解する。</li> <li>3) 臨地実習の内容と効果的な指導方法を理解する。</li> <li>4) 実例を通して臨地実習指導の実際を理解する。</li> <li>5) 臨地実習指導における自己の課題および指導者像を明確化する。</li> </ol>

表2 第1日目研修の概要

時 間	内 容
10:00~12:10	講義I 「看護教育の基礎」(講師：野崎 真奈美 教授) ・大学における看護教育の概要等 「臨地実習指導の基礎」(講師：湯浅 美千代 教授) ・大学教育における臨地実習の位置づけ ・実習指導者に期待すること
13:00~16:30	演習I 「実習指導の経験をリフレクションする」(担当：伊藤龍子教授、仙石妙子主任) ・学生との計画調整、看護技術に関する指導、学生とのコミュニケーション場面等について、過去に困難と感じが学生指導に関して振り返る ・上記の場面についてグループワークにて自身とメンバーの経験からリフレクションを行う まとめ 「グループワークの経過発表」と講評

かれた。

#### (5) 終了後アンケート

参加者47名中46名（回答率97.9%）から回答が得られた。「看護学教育の基礎、臨地実習指導の基礎の2つの講義について理解できたか」「実習指導に役立つ知識を得ることができたか」については全員が理解できたとの回答があった。演習については「学生の対応困難事例について共有できたか」については98%がそう思うと回答していた。自由記述には「他病院、他病棟の臨地実習指導者の皆さんと考えを共有したり新しい発見をしたりすることができた」や「大学教育について学ぶ機会はなかったの、臨地実習指導者として新たな視野を持って取り組んでいけそうだと思った」「今までの実習指導では、学生との関わり方や教員との連携があいまいなままであったが、今日学んだことを今後の実習指導に役立てたい」、「ディスカッション（リフレクション）の時間がとても有意義だった」との意見があった。

## 2. 第2日目：平成29年10月28日(出)

- (1) テーマ：臨地実習における臨地実習指導者の教育的役割とは
- (2) 当日の内容：第2日目の研修概要は表3の通り

である。

#### (3) 事前課題について

第1日目の研修終了後、2日目の研修に向け事前課題が課された。課題内容としては「臨地実習指導者の教育的役割についてどのように考えるか」について自分の考えをレポートにまとめるものである。この課題は、第2日目の研修の際により学びを深めることができるよう設定されている。

研修前に提出されたレポート内で、研修の受講生が考えた臨地実習指導者の教育的役割について述べられている記述を抽出し、意味内容ごとに分類した結果を表4に示す。受講生が臨地実習指導者の役割であると認識している内容は12に分類された。「学生の満足度と自己効力感を高めるように教育する役割」があると認識している記述が最も多かった。

#### (4) 講義Ⅱの講義概要

附属病院で実施している臨床指導者会の概要をもとに、学生の指導だけでなく、実習環境としての部署内の人材育成やマネジメント等、臨地実習指導者としての視野を上げた役割について提案があった。

#### (5) 演習Ⅱグループワークでの学び

事前課題や講義Ⅱを踏まえ、各グループにて学びを整理したり、テーマについて討論することでさらに考

表3 第2日目研修の概要

時 間	内 容
10:00~10:45	講義Ⅱ 「臨地実習指導者の教育的役割とは」（講師：山本育子教育課長）
10:50~12:00	演習Ⅱ 「臨地実習における臨地実習指導者の教育的役割についてグループ討議」（担当：原田静香委員） <ul style="list-style-type: none"> <li>・事前に配布した文献、事前課題として作成したレポート、講義Ⅱでの学びを基にグループワークを通して臨地実習指導者の教育的役割について討議する</li> <li>・討議内容を掲示用のポスターにまとめる</li> </ul>
	まとめ 討議内容についてのポスター掲示と閲覧

表4 臨地実習指導者の教育的役割をどのように考えるか

類 型	記述数
学生の満足度と自己効力感を高めるように教育する役割	40
事前準備を含めた実習環境として、体制を整備・調整する役割	39
学生にとってのロールモデルとなって教育する役割	38
学生の立場を理解して歩み寄る役割	30
実習指導に向けた病棟スタッフの育成とスタッフ間を調整する役割	23
効果的な教育に向けて大学教員と協働および連携する役割	22
臨地実習指導者の自己研鑽と人材育成に貢献する役割	14
大学の看護教育課程を理解して教育する役割	10
多職種との連携によるチーム医療について教育する役割	7
消極的な学生に対して配慮して教育する役割	6
適切な看護過程の展開について教育する役割	5
看護の喜びや楽しさを伝える役割	4

えを深めたりとグループワークを行った。その結果を関連図としてまとめ、模造紙に表した(図1)。各グループでオリジナリティーのある関連図が作成され、教室内に掲示した上で閲覧し、その内容について共有された。

3. 第3日目：平成29年12月16日(土)

- (1) テーマ：臨地実習指導者に期待することと今後の展望
- (2) 当日の内容：第3日目の研修概要は表5の通りである。
- (3) 講義Ⅲ・Ⅳの概要

講義Ⅲではまず、医療を取り巻く社会の変化から、期待される看護の役割をとらえるために改定2016年「看護業務規準」の内容について説明があった。そして、

平成26年度の診療報酬改定の基本方針として掲げられた「地域包括ケアシステム」について示され、今後の日本においては病院内での役割にとどまらず、看護職にどのようなことが期待されるかが話された。これらの背景を踏まえた上で、次世代の看護を担う後輩たちに接する前に、臨地実習指導者自身が自分の看護観を明確に持っているのかとの問いかけがあり、自立・自律心を備えた看護職となるよう激励があった。さらに、学生の実習に対するモチベーションを高めるような具体的な対応について助言があった。

講義Ⅳにおいては、現在の大学生像や学生が実習に対して抱いているイメージについて解説があった。そしてその学生を実習として受け入れ、どのような人材に教育していくかを方向づける理念としては、大学の学是や各附属病院の看護部が掲げる理念を念頭におく

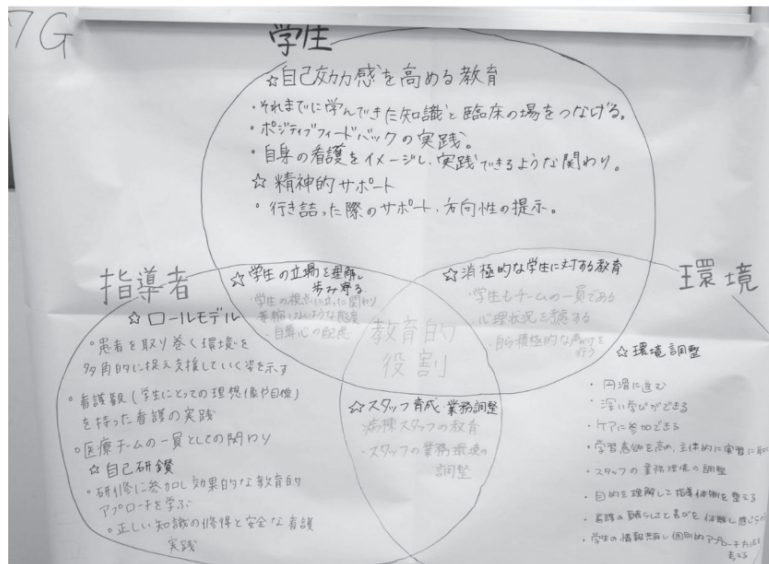


図1 グループワークの成果例

表5 第3日目研修の概要

時間	内容
10:00~11:00	講義Ⅲ 「臨地実習：実習に臨む学生のあり方と臨地実習指導者に期待すること」 (講師：照沼則子 看護部長補佐) <ul style="list-style-type: none"> <li>・臨床における学生の心構えについて</li> <li>・臨床実習指導者に求められることとは、等</li> </ul>
11:10~12:00	講義Ⅳ 「臨地実習指導者像」(講師：看護部 鶴沢久美子師長) <ul style="list-style-type: none"> <li>・本院における新任者技術習得状況</li> <li>・看護基礎教育と継続教育</li> <li>・専門職業人を育てる、人材育成の方法等</li> </ul>
13:00~15:15	演習Ⅲ 臨地実習指導の展望 <ul style="list-style-type: none"> <li>・実習記録指導の実際を把握する</li> <li>・実習記録の事例を通し、効果的な記録指導とは度の湯なものか討議する</li> </ul>
15:20~16:00	まとめ 「グループワークの経過発表」と講評



表6 臨地実習指導者研修会最終レポート「臨地実習指導における自己の課題と指導者像」

カテゴリ	コード	代表的な記述	記述数
学生を主体とした指導技術を磨く	学生と学びを共有し、理解度を確認する	実習での学びを深めるために自分が指導したことについて学生が理解しているか確認する必要がある	58
	カンファレンスを通して実習の学びを深める	学生の疑問や失敗にただ指導するだけでなく、解決するまで待つことや、カンファレンスにて学生間で解決する糸口を探ることができるようにしたい	
		カンファレンスで振り返ることや、日々の記録を記載してもらうことで体験での学びを深める場を作る必要がある	
	学生の能力を信じて引き出す	学生は表面的な部分では見えない潜在能力を兼ね備えている。それを記録や言葉1つを大切にしていけるように関わりたい	
	学生の目標を理解し達成できるように関わる	学生の実習目標にあった担当患者の選定を行い、看護計画立案や看護実践について指導する	
看護にやりがいや楽しさを感じてもらえるよう関わる	「看護は楽しい、やりがいがある」と感じ、看護に対してモチベーションが高まるような指導を行う		
実習を受け入れる環境を整える	スタッフへの実習指導協力依頼の工夫	病棟全体で学生を受け入れられるよう実習目的を理解し、実習中のケアの協力、患者や学生の反応など情報交換をし、学生とスタッフの橋渡しをする	55
	スタッフの教育をする	指導対象は学生だけでなく病棟スタッフも重要。まずは自分自身がロールモデルとなりケアを提供していきたい	
	チームの一員として受け入れる	スタッフとの関わりやカンファレンスに学生が参加できる環境を整えたい。病棟全体で学生を受け入れることで、患者にとってもより良いケアを提供できると思う	
学生を包括的に理解する	学生の立場に立ち、思いや考えを汲み取る	学習者としての立場も大切にし、指導者として常に学生の思いや感じていることを考え、小さな反応も見逃すことなくコミュニケーションをとっていきたい	31
	現在の学生の特性や傾向を理解する	看護学生はこうあるべきだと考えて指導しているところがあった。時代背景によって学生にも特徴があり、指導側も指導方法について考えていく必要がある	
	学生のレディネスを把握する	学生それぞれそれぞれの力量を見極め、どこまでの到達度を持っていくかを考える	
マネジメント能力の向上に努める	スタッフとの連携や時間管理のマネジメント能力が必要である	患者や同行するスタッフの選定、実習内容の調整など様々な役割を担う必要があるため、人、時間の調整を円滑に行うマネジメント能力が重要	29
	自分や周囲の人の感情を冷静に捉えて対応する	患者の思い、学生の思い、教員の思い、どの思いに偏ってもいけない。指導者が客観的にそれぞれの思いを捉え、冷静に臨機応変に対応することが必要 すぐにイライラして冷静さに欠け客観的に対応できないので、アンガーマネジメントに努めたい	
コミュニケーション技術の向上を図る	ポジティブフィードバックを実践する	学生に対してまずは褒める、認めることを意識し、認めてからできていないことや足りないところを、次はこのようにした方がいいという形で指導していきたい	27
	学生に伝わるような工夫をする	学生の特性を理解し伝わる言葉、表現を用い、伝える場面、場所も選ぶ必要がある	
自己研鑽を続ける	根拠となる知識を持つ	学生に指導するうえで、自分がきちんと理解できていないと十分に伝えることはできない。エビデンスに基づいた看護を提供できるよう、日々自己研鑽に努めていきたい	27
	自分の看護実践能力を向上させる	日頃の看護ケアから多角的に物事をみる訓練をしていきたい 日頃から根拠のある行動や患者にとって良いケアとなるような行動や指導ができるようにしていきたい	
	実習指導の場面から学ぶ	学生と一緒に患者のために何ができるか考え、学生だから感じられる事や別の視線からの意見に耳を傾け私自身も学んでいきたい	

カテゴリ	コード	代表的な記述	記述数
自分の看護観を十分に認知する	自分の看護観を見つめなおす	自身の看護観を再度振り返り、卓越した看護実践を提供する役割モデルとして日々学びを深める	24
	学生に看護観を伝える	自分自身が看護観を学生に少しでも伝えることができるような関わりをしていきたい	
看護ロールモデルとなる	看護ロールモデルとなる	自ら率先し、ロールモデルとなって理想の看護師像を学生に提示していきたい。常に良きロールモデルとなれるよう、自律した行動をとっていきたい	21
実習指導担当の大学教員と密な連携を図る	学生の個性を知るための情報共有をする	学生の個性や特徴を短期間で指導者が把握することは難しいため、指導者と教員が連携し情報を共有していく必要がある	18
	学生の行動計画が実施できるよう教員と調整する	教員との話し合いの中で、学生がケアをしやすいうように環境を整え、フォローできることを考えたい	
臨地実習の基盤を理解する	教育方針、実習目標を把握する	指導者は、大学の教育方針、実習目的や内容を理解し、病棟全体で指導に関われるように指導体制を整えておく	6
	病院・看護部の理念を把握する	病院や看護部の理念を踏まえたうえで実習指導ができるのが理想であり、今後も意識しながら指導を行う	

必要があるのではないかとの教示があった。

#### (4) 演習Ⅲグループワークでの学び

グループワークでは、実際に臨地実習を担当している教員が学生の実習記録を用いて、記録による学生の学びのプロセスの実際を紹介した。学生の学習プロセスに沿って、実習記録に記載されている内容の質が向上することを確認し、学生が実習中の学びを記録として記述することでリフレクションしていることに気づいていた。さらに、記録指導をした際の教員のコメントにも注目し、担当教員の指導観についても共有していた。

グループワークでの学びについては、その成果を資料にまとめ、全体会の場でプレゼンテーションを行った。

#### (5) 終了後アンケート

参加者43名全員から回答を得られた。「講義Ⅲ・Ⅳは理解できたか、今後の実習指導に役立つ知識を得ることができたか」については全員が非常にそう思う、そう思うと回答していた。グループワークについては「テーマに関して共有ができたか」との問いには42名(97.7%)の者が非常にそう思う、そう思うと回答していたが、1名(2.3%)があまりそう思わないと回答していた。グループ間で討議内容の差があった可能性が推察された。

自由記述によると、「自分自身の看護観、キャリアアンカーを見直す機会となった」「今まで大学や病院、看護部の理念を考えた指導をしていなかったことに気づいた。今後は理念の内容を踏まえて指導することが

重要と思った」等の意見が聞かれた。

#### 4. 全研修終了後の課題レポートについて

研修終了後の最終課題として「臨地実習指導における自己の課題と指導者像」というテーマでレポートを作成した。提出されたレポートの内容について、質的記述的にまとめた(表6)。

全研修内容を踏まえ、対象者が臨地実習指導者として今後、自身をどのように活動したら良いかが述べられており、「学生を主体とした指導技術を磨く」「実習を受け入れる環境を整える」等の10カテゴリが得られた。臨地実習指導者が学生を理解して深い学びにつながる思いや、実習環境を整えるために病棟スタッフとの調整の実施、そして自分自身の研鑽活動を続けていく必要性について気づいていた。

### IV. 考察

#### 1. 研修会の意義について

2012年、文部科学省(2012)における中央教育審議会の答申にて、大学教育の質的転換に向け、アクティブラーニングによる教育方法を推進することとなった。アクティブラーニングとは基本的に、教室内での教授活動のことを指している。しかし看護学実習においては、教室内で学んだ多くの知識を用いて実習の場で実践し、学内に戻り実習にて深めた知識や技術をリフレクションし、次の実践へとつなげていくというプロセスがある。教室外で行う実習ではあるが、看護学の臨地実習は教室内の学習とのつながりが深いと考

え、アクティブラーニングの考え方をを用いて、臨地実習指導者研修会の意義について述べたい。

アクティブラーニングという言葉は教育分野の文献では正確に定義されていないが、Charles C. Bonwell et al. (1991 高橋訳 2017) によるいくつかの特徴によると「①学生が単に聞くこと以上に授業に参加している、②情報伝達よりもスキル開発に重点が置かれている、③学生がより高次の思考に没入している、④学生が読み、議論し、書くといった活動に従事している、⑤学生が自分自身の態度や価値観を探究することにより重点が置かれている」とされている。

表4のレポート結果から、受講者が臨地実習指導者の教育的役割であると考えている内容に、アクティブラーニングの特徴を捉えた回答をしていることが分かる。具体的には、「①学生が単に聞くこと以上に授業に参加している」については、「消極的な学生に対して配慮して教育する役割」があるとし、学生が能動的に実習へ参加できる配慮をしている。「②情報伝達よりもスキル開発に重点が置かれている、④学生が読み、議論し、書くといった活動に従事している」の2項目については、「効果的な教育に向けて大学教員と協働及び連携する役割」があるとし、学生の看護技術の向上やリフレクションのためのカンファレンス、実習記録の指導に大学教員と協働・連携が重要であることを認識している。「③学生がより高次の思考に没入している」については、「適切な看護過程の展開について教育する役割がある」が当てはまると考えられる。担当患者の状態を捉えて必要な看護活動を行うためには、患者の情報収集やアセスメント、評価といった高次の思考を繰り返すことになる。これはまさに適切な看護過程を展開することとであり、それに関する教育の重要性を述べている。最後に「⑤学生が自分自身の態度や価値観を探究することにより重点が置かれている」については「学生の満足度と自己効力感を高めるように教育する役割」「学生にとってのロールモデルとなって教育する役割」「看護の喜びや楽しみを伝える役割」と、学生の自己効力感、看護観を発展させるような関わりが必要であるとの認識を持っていることが分かった。

Fink (2003 土持訳 2011) は高等教育において「意義のある学習経験」を学生にもたらすことが重要であると述べている。この言葉の中心概念は、教えが他者からみて、この学習経験が学生たちの人生に本当の意味で意義あるものになった、と言えることである。そ

れをもたらすためのアプローチとしてやはり、アクティブラーニング式の教育方法が必要であると述べている。本研修においては受講者自身が教育的役割を自覚するにあたり、アクティブラーニングの特徴を捉えた実習指導についての考えを促すことができている、臨地実習での学びを学生が「意義のある学習経験」へと発展させるための基盤づくりに寄与したと推測される。

## 2. 今後の課題について

本研修会は昨年度より実施方法が改められ、本年度は2年目の実施であったが、運営に関しては順調に実施することができたと思われる。また、各回の研修会終了後のアンケートからは、研修会の実施方法や内容について、概ね良好な評価を得ていた。よって、次回に向けても大学と附属病院の共同開催、そして年間で複数回の開催をするという実施方法を継続しながら、研修内容の充実を図りたいと考える。

表6の最終レポートから挙げられた10項目をみると、「実習を受け入れる環境を整える」「実習指導担当の大学教員と密な連携を図る」「臨地実習の基盤を理解する」といった項目については、臨地実習指導者のみで解決すべき課題ではなく、大学教員が連携・協働して解決すべき内容が見受けられた。本研修会で得られた受講者の成果については、資料を大学内で共有する等を行っているが、このような内容については実習の質の改善につながり、即時に対応できる項目として、研修成果を次年度の実習運営に活かすシステムを確立する必要があると考える。

また、「学生を主体とした指導技術を磨く」「学生を包括的に理解する」「マネジメント能力の向上に努める」「コミュニケーション技術の向上を図る」という、受講生自身の具体的な能力開発に関する項目があった。このような内容については、本研修会終了後も受講生の継続学習の必要性を示唆しており、研修会修了生のフォローアップ体制を整えていくことについても議論を行う必要があるのではないか。さらに、フォローアップ体制を整えることで「自分の看護観を十分に認知する」「看護ロールモデルとなる」「自己研鑽を続ける」という自己を見つめなおす機会の提供にもなると考える。沖野ら (2009) によると、受講者の約2割が研修会終了後に受講したテーマについて意欲や関心が低下していることを指摘し、フォローアップ研修の必要性を述べている。次年度は新たな受講生を募り



実施していくこととなるが、修了生のフォローアップの一案として、受講生を通じて病棟全体が学生実習の質的向上を考える風土を培うことができるよう、研修内容・方法を検討したいと考えている。具体的には、研修を受けて見出された実習指導に関する課題の改善策を、実際に病棟内スタッフを巻き込んで実施することを促し、その実施状況や成果について次回研修の場にて受講者が報告をするといった事後課題を設定することである。これにより、受講生が病棟内で実習指導に関する課題の改善策を講じる際には、修了生がその支援者となることを期待している。修了生自身にとっても前年度の学びを活かす場となるのではないだろうか。今後の研修会の実施内容と成果について、引き続き検討していきたい。

## V. おわりに

本学部及び順天堂大学附属6病院看護部の共同開催として、第2回臨地実習指導者研修会を開催することができた。開催にあたり、ご協力頂きました工藤綾子学部長、本部会委員、FD委員会委員、附属6病院看護部部長を始め、看護部関係者の皆様方、3日間のプログラムにご協力頂きました受講生そしてスタッフの皆様、

多大な事務業務を担ってくださった事務局の皆様、研修場所を提供していただきました国際教養学部長、皆様方のご尽力により研修会が実施できましたことを心より感謝いたします。

## 引用文献

- Charles C. Bonwell and James A Eison(1991/2017). 高橋悟(監訳). 最初に読みたいアクティブラーニングの本(初版). 2-3. 海文堂出版株式会社.
- L. Dee Fink(2003/2011). 土持ゲーリー法一(監訳). 学習経験をつくる大学授業(初版). 20-40. 玉川大学出版部.
- 文部科学省(2012). 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申). 文部科学省ホームページ. [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm), (Jun 20, 2018)
- 沖野良枝, 米田照美, 前川直美, 金森京子, 杲朋子, 藤井淑子ら(2009). 実習指導者講習会の継続・発展を目指すフォローアップ研修の効果. 人間看護学研究, 7, 63-72.